音楽科授業における子どもの嗜好とその変化
―小学校５・６年生の場合―

杉　山　知　子

美作大学・美作大学短期大学部紀要（通巻第53号抜刷）

美作大学・美作大学短期大学部紀要
2008, Vol. 53. 85 ～ 95

報告・資料

音楽科授業における子どもの嗜好とその変化
―小学校５・６年生の場合―

School Children's Liking and its Changes in Music Class

杉　山　知　子

キーワード：音楽科授業、小学校高学年、子どもの嗜好、男女差、変化

１．はじめに

小学校高学年の子どもたちの音楽行動は、この20年間で大きく変化してきた。[1)] それは一言で言うなら、「CDの貸し借り」というような「若者」の音楽行動が、最近では小学生に見られるようになってきたということである。これには社会全体の変化が関与していると考えられる。

近年、テレビには10代前半の子どもたちが歌やダンスで登場する場面が増えた。小学校高学年の子どもたちは、自分と同じ年頃の子どもたちが歌やダンスをする様子をテレビで見て、たいへん大きな刺激を受けたものと思われる。一方、家庭にはテレビから流れる音楽のCDなど音楽ソフトやその再生装置が普及し、それらの結果として、以前は小学生に見られなかった「CDの貸し借り」や「CDの購入」などが見られるようになったのである。

このように、子どもの音楽行動の変化がテレビの影響を受けたものであるなら、子どもの音楽嗜好もテレビから流れるような音楽に向かっているのではないかと推察される。

ところで、CDの再生装置は現在ではほとんどの小学校で完備していると考えて差し支えないであろう。また、CDは扱い方や選曲の方法がレコードに比べて格段に容易である。そのため、音楽の授業におけるCD利用は、レコード時代に比べてはるかに多いのではないかと考えられる。その結果、音楽の授業は昔に比べてたいへん幅広く、様々な内容で展開できているのではないか。

そのような音楽の授業に関して、子どもは学校の授業の中で「音楽」をどのように位置付けているのだろうか。また、「音楽」の活動内容についてどのように捉えているのだろうか。

以上のように、子どもの嗜好を把握するため、小学校高学年の子どもを対象として、音楽科授業に関する好みの調査を行った。子どもの望む音楽活動を把握し、音楽器機を上手に活用することにより、より一層、音楽の授業を充実したものにすることができるのではないかと考えたからである。

なお、今回の調査内容は、過去２回にわたり同じ小学校において行ったものと同一内容である。そのため、今回の結果とともに、時代による嗜好のちがいについても述べる。

２．調査方法および内容

小学校５・６年の子どもを対象として、音楽の授業や活動内容についてどのように思っているのかに関する質問紙調査を行った。

調査時期等については以下のとおりである。

＜調査の時期＞　１回目・・・1986年　８月
　　２回目・・・1999年　５月
　　３回目・・・2005年12月

＜調査対象校＞　岡山県内のM小学校（３回とも同

じ小学校とした）

＜対象学年および人数＞

	５年生		６年生		計
	男子	女子	男子	女子	
１回目（1986 年）	26	32	41	33	132
２回目（1999 年）	33	32	33	26	124
３回目（2005 年）	39	25	15	25	104

＜調査の手続き＞

クラス担任が質問紙を教室で配布し、その場でクラスの児童一斉に記入させた。

＜質問の内容＞

質問内容の概略は以下のとおりである。

１）音楽科目の好みに関する事項

①小学校の授業の中で好きな科目について

・８教科のうちで好きな科目３つに○をつける。

②「学校の音楽」と「学校以外の音楽」に対する好みについて

・「学校の音楽」が好き、「学校以外の音楽」が好き、「両方」好き、「両方」きらい、の中から１つに○をつける。

２）音楽の授業活動に関する事項

①「歌をうたう活動」

②「楽器演奏をする活動」

③「音楽を作る活動」

④「音楽を聴く活動」

⑤「楽譜や音符の勉強をする活動」

①～⑤について、「やりたい」、「やりたくない」、「どちらでもない」の中から１つを選んで○をつけることを各項目ごとに行ってもらった。

３．音楽科目の好みに関する結果と好みの変化

１）学校の授業における好きな科目

小学校５・６年生の授業科目には、「国語」「社会」「算数」「理科」「音楽」「図画工作」「家庭」「体育」の８教科が設けられている。その中で好きなもの３つに○を付けてもらった結果、表 1. のようになった。

表 1. より、男子の多くは「体育」と「図画工作」が好きであり、「音楽」が好きなのは 18 名（33.3％）と３分の１程度であった。一方、女子は 41 名（82％）

表 1. 学校の教科で好きな科目　　人数（％）

	男子（54 名）	女子（50 名）
国　　語	7（13.0）	7（14.0）
社　　会	12（22.2）	5（10.0）
算　　数	17（31.5）	12（24.0）
理　　科	20（37.0）	11（22.0）
音　　楽	18（33.3）	41（82.0）
図画工作	29（53.7）	22（44.0）
家　　庭	16（29.6）	28（56.0）
体　　育	36（66.7）	19（38.0）

表 2-1. 男子における音楽科目の好み　　人数（％）

	音楽科目は「好き」	音楽科目は「好きではない」	計
1986 年	13（19.4）	54（80.6）	67
1999 年	11（16.7）	55（83.3）	66
2005 年	18（33.3）	36（66.7）	54

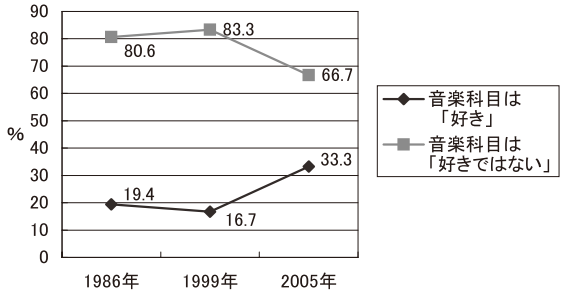

図 1-1. 音楽科目の好み（男子）

と８割以上が「音楽」を好きな科目に挙げており、それは、他の科目に対する支持率に比べ非常に高いものであった。このように、男子と女子では好きな科目に大きな差が見られた。(0.1％水準で有意)

次に、今回（３回目）の結果とこれまでの１・２回目の結果をまとめたものを示す。好きな三科目に「音楽」を入れている場合を「好き」とし、入れていない場合は「好きではない」とみなして集計した。

表 2-1. および図 1-1. は男子について、表 2-2. および図 1-2. は女子について示したものである。

男子についてみると、表 2-1. および図 1-1. から、「音楽科目が好き」という児童は１回目と２回目の調査時に比べて増えていることがわかる。しかし、有意な差とまでは言えない。

女子については表 2-2. および図 1-2. から、1986 年よりは 1999 年の方が、1999 年よりは 2005 年の方が「音

表 2-2. 女子における音楽科目の好み　　人数（%）

	音楽科目は「好き」	音楽科目は「好きではない」	計
1986 年	39（60.0）	26（40.0）	65
1999 年	38（65.5）	20（34.5）	58
2005 年	41（82.0）	9（18.0）	50

p<.05

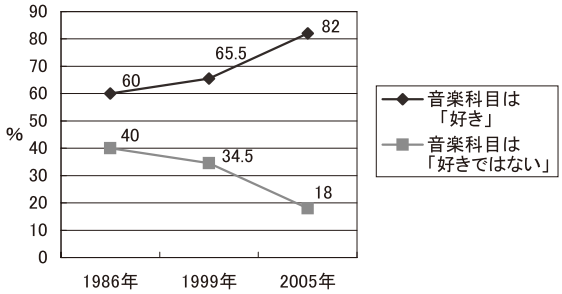

図 1-2. 音楽科目の好み（女子）

楽科目が好き」という児童が増えている。つまり、現代に近づくにつれて、「音楽科目が好き」という児童は多くなっているのである。これは検定の結果、５％水準で有意であった。

以上より、音楽科目は昔に比べて現代の方が、男女ともに児童に支持されていることが明らかとなった。その理由としては次に述べるように、子どもの音楽行動の変化、教室への音楽器機の充実、授業への音楽ソフト導入の３つが考えられる。

まず、子どもの音楽行動の変化として、テレビなどマスメディアの影響により、子どもが「若者」の音楽に関心を持つようになった結果、「CD を聴く」、「CD を買う」というような音楽行動が増えてきた。[2)] そのように音楽への関心が高まっているところに、授業においては、教室に音楽器機が完備し、それを用いた授業ができるようになってきた。そして、音楽ソフトが充実し、扱い方が易しくなったことにより、[3)] 豊かな内容のものを容易に児童に提供できるようになった。このような結果、音楽の授業が好きだという児童が増加したのではないかと考えられる。

２）「学校の音楽」と「学校以外の音楽」に対する好みについて

「学校の音楽」と「学校以外の音楽」について、好みを回答してもらったところ、今回の結果は表 3-1. のようになった。

表 3-1.「学校の音楽」と「学校以外の音楽」の好み
2005 年　　人数（%）

	両方好き	学校の音楽が好き	学校以外の音楽が好き	両方嫌い	計
男子	13(24.1)	17(31.5)	16(29.6)	8(14.8)	54
女子	29(58.0)	7(14.0)	13(26.0)	1(2.0)	50

表 3-1. より、男子で最も多かったのは「学校の音楽が好き」で 17 名（31.5%）であった。次いで「学校以外の音楽が好き」で 16 名（29.6%）となっており、ほぼ同数であった。また、「両方好き」とする児童は 13 名（24.1%）、「両方きらい」とする児童は８名（14.8%）であった。

「学校の音楽が好き」と「両方好き」という児童、つまり、学校の音楽を支持する児童は 30 名（55.6%）である。これを表１の好きな３科目との関連でみれば、音楽科目そのものは好きな３科目の中に入れていないが、学校の音楽は好きという児童が過半数であることがわかる。

一方、女子の場合には、「両方好き」という回答が最も多く 29 名（58.0%）、次いで「学校以外の音楽が好き」13 名（26.0%）、「学校の音楽が好き」7 名（14.0%）の順であった。また、「両方きらい」とする児童は１名（2.0%）であった。

女子の場合には、「学校の音楽が好き」と「両方好き」という児童を合わせると、36 名（72%）となる。表１と合わせ考えると、「学校以外の音楽が好き」と回答した女子も、好きな３科目に「音楽」を入れていることがわかる。

このように、学校の音楽も学校以外の音楽も「両方ともきらい」とする児童は、男子８名（14.8%）、女子１名（2.0%）というように少なく、大多数の児童は音楽そのものは好むことが分かる。このため、音楽の授業内容の工夫により、「音楽科目が好き」という児童をより一層増やすことは可能であると考えられる。

一方、「両方ともきらい」という男子８名、女子１名については、音楽そのものが嫌いであることが考え

られる。その場合には、授業内容の工夫によって音楽科目を好きにさせる、というのはたいへん難しいかもしれない。

以上のような、音楽科目の好みに関して今回の結果と過去２回の結果をまとめたものが表 3-2. および表 3-3. である。

表 3-2. は男子について、表 3-3. は女子について示している。

表 3-2. 男子における「学校の音楽」と「学校以外の音楽」の好み　　人数（%）

	両方好き	学校の音楽が好き	学校以外の音楽が好き	両方嫌い	計
1986年	6(9.2)	12(18.5)	25(38.5)	22(33.8)	65
1999年	2(3.0)	8(12.1)	23(34.8)	33(50.0)	66
2005年	13(24.1)	17(31.5)	16(29.6)	8(14.8)	54

p<.001

表 3-2. より、男子では 1986 年および 1999 年に比べて 2005 年の方が、「両方好き」や「学校の音楽が好き」が非常に増えている。逆に「両方きらい」は大幅に減っている。これらは検定の結果、0.1％水準で有意な差であることが判明した。

この表をグラフにしたものが図 2-1 である。

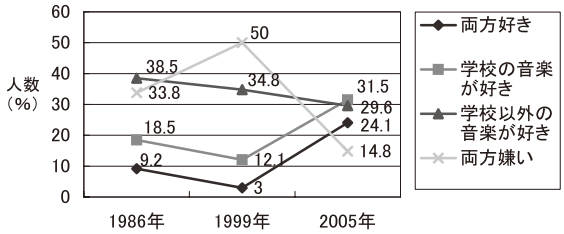

図 2-1.「学校の音楽」と「学校以外の音楽」の好み（男子）

一方、女子については表 3-3. と図 2-2 に示すように、1999 年において「学校以外の音楽が好き」とする児童が他の調査年よりも２倍近く多くなっている。しかし、検定の結果、有意差は見られず、全体の傾向としては「学校音楽も学校以外の音楽も両方好き」とする比率が高いことが分かる。

表 3-3. 女子における「学校の音楽」と「学校以外の音楽」の好み　　人数（%）

	両方好き	学校の音楽が好き	学校以外の音楽が好き	両方嫌い	計
1986年	33(51.7)	8(12.5)	19(29.7)	4(6.3)	64
1999年	21(36.2)	4(6.9)	33(56.9)	0	58
2005年	29(58.0)	7(14.0)	13(26.0)	1(2.0)	50

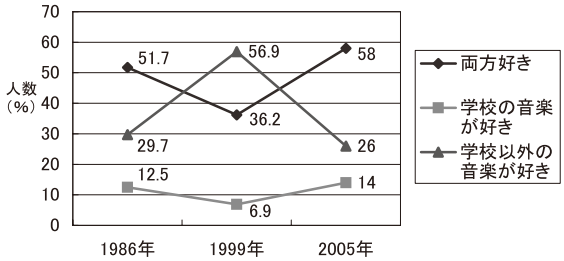

図 2-2.「学校の音楽」と「学校以外の音楽」の好み（女子）

４．音楽の活動内容に対する好みとその変化

１）「歌をうたう活動」について

授業で歌をうたうことについては、表 4-1. に示すとおりであった。

表 4-1. 授業で歌を歌うこと　　人数（%）

	やりたい	やりたくない	どちらでもない	計
男子	13(24.1)	11(20.4)	30(55.6)	54
女子	29(58.0)	6(12.0)	15(30.0)	50

p<.005

表 4-1. より、女子は 29 名（58％）が「歌いたい」と思っており、「歌いたくない」のは 6 名（12％）であった。一方､男子は「歌いたい」は 13 名（24％)､「歌いたくない」は 11 名（20％）というように、「歌いたい」と「歌いたくない」はほぼ半々であった。

このように、歌をうたうことを「やりたい」と思っている女子は多いのに対し、男子は少なく、それらは有意な差であった。(0.5％水準)

この表をグラフにしたものが図 3-1. である。

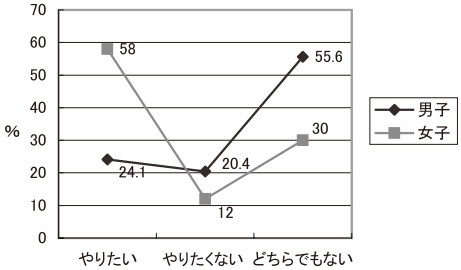

図 3-1. 授業で歌を歌うこと

男子は、「歌いたい」と思っている児童が女子に比べてたいへん少ない。しかし、表 4-2 に示すように、時代による男子の変化をみると、昔よりも現在の方が、「歌いたい」と思う男子は多いことがわかる。この表をグラフにしたものが図 3-2. である。

表 4-2. 授業で歌を歌うこと（男子）　　人数（%）

	やりたい	やりたくない	どちらでもない	計
1986年	5(7.5)	24(35.8)	38(56.7)	67
1999年	12(18.2)	28(42.4)	26(39.4)	66
2005年	13(24.1)	11(20.4)	30(55.6)	54

p<.02

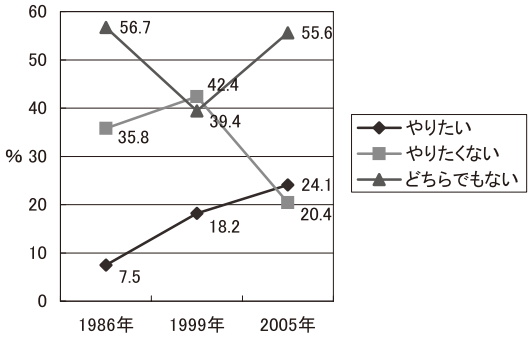

図 3-2. 授業で歌を歌うこと（男子）

表 4-2. より、歌をうたうことを「やりたい」という比率は、1986 年で 7.5％、1999 年で 18.2％、2005 年で 24.1％というように急激に増えている。これらは有意な差であった。(2%水準)

女子の時代変化についても、表 4-3. および図 3-3. に示すように、「やりたい」が増えて、逆に「やりたくない」や「どちらでもない」という回答は減っている。これらについても有意差が見られた。(2%水準)

表 4-3. 授業で歌を歌うこと（女子）　　人数（%）

	やりたい	やりたくない	どちらでもない	計
1986年	24(36.9)	9(13.8)	32(49.2)	65
1999年	21(36.2)	17(29.3)	20(34.5)	58
2005年	29(58.0)	6(12.0)	15(30.0)	50

p<.02

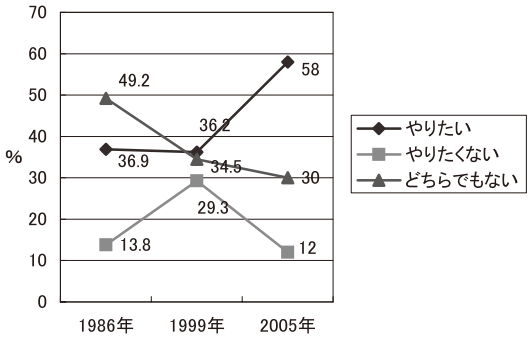

図 3-3. 授業で歌を歌うこと（女子）

今回の調査において、歌をうたうことについては男女差が見られ、「やりたい」とする比率は明らかに女子の方が高かった。しかし、男子においても前回の調査よりも今回の方が、「やりたい」という児童が増えているという結果となった。

２）「楽器演奏をする活動」について

授業で楽器演奏することについては、表 5-1. に示すとおりであった。

表 5-1. 授業で楽器演奏をすること　　人数（%）

	やりたい	やりたくない	どちらでもない	計
男子	38(70.4)	1(1.9)	15(27.8)	54
女子	42(84.0)	3(6.0)	5(10.0)	50

表 5-1. より、楽器演奏をやりたいと思っている児童は非常に多く、男子は 38 名（70.4％）、女子は 42 名（84％）を占めていた。逆に、「やりたくない」と回答した児童は、男子 1 名 (1.9％)、女子 3 名（6％）となっていた。このように、後に述べる他の活動に比べて、楽器演奏は男女ともに音楽活動の中でも最も好まれる活動であることが明らかとなった。

男子は「音楽」を好きな 3 科目に入れている比率が 33％（表 1 ）とあまり高くない状況の中で、「楽器

演奏をやりたい」という回答は70％もあるという結果であった。これは、授業の工夫次第では男子を音楽好きにさせる余地のあることを示唆するものではないか。

また、女子についても、「歌うことをやりたい」の58％よりもはるかに多い84％が「楽器演奏をやりたい」と回答していることがわかる。

ところで、小学校高学年の子どもに「楽器演奏」といったときに、何の楽器を思い浮かべる児童が多いのだろうか。それは多分、リコーダー（ソプラノ・リコーダー）ではないかと推測される。

リコーダーは、非常に荒っぽい言い方をすれば、運指さえ正確にできれば、一定の音高を出すことは誰でも容易にできる楽器である。この点、自分で音高をコントロールしなければならない「歌」よりも抵抗が少ないのではないかと考えられる。そのため、リコーダー演奏は男子にも女子にも好まれるのではないだろうか。

次に、好みの変化について、男子を表5-2.に、女子を表5-3.に示した。

表5-2. 授業で楽器演奏すること（男子）　人数（％）

	やりたい	やりたくない	どちらでもない	計
1986年	17(25.4)	24(35.8)	26(38.8)	67
1999年	18(27.3)	24(36.4)	24(36.4)	66
2005年	38(70.4)	1(1.9)	15(27.8)	54

p<.001

表5-3. 授業で楽器演奏すること（女子）　人数（％）

	やりたい	やりたくない	どちらでもない	計
1986年	42(64.6)	6(9.2)	17(26.2)	65
1999年	23(41.1)	10(17.9)	23(41.1)	56
2005年	42(84.0)	3(6.0)	5(10.0)	50

p<.001

男子については、表5-2.に示されるように、「やりたい」が1986年では17名（25.4％）、1999年では18名（27.3％）というように数値に大きな差は見られない。ところが、2005年になると「やりたい」という児童は38名（70.4％）と激増している。逆に、「やりたくない」は1986年、1999年共に24名であるのが、2005年では1名へと激減している。(0.1％水準で有意)

3回の調査結果をグラフにしたものが図4-1.である。

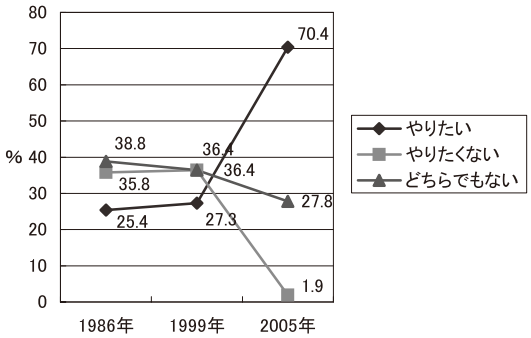

図4-1. 授業で楽器演奏すること（男子）

女子については、表5-3.に示されるように、「やりたい」が1986年では42名（64.6％）、1999年では23名（41.1％）、2005年では42名（84％）であった。また、「やりたくない」は1986年で6名（9.2％）、1999年で10名（17.9％）、2005年で3名（6％）となっており、3回の調査を比較すれば、1999年の児童が消極的な態度であり、逆に、2005年の児童が積極的な態度といえる。また、2005年に84％の女子が「やりたい」としていることに関して、この数値は3回の調査の中でも最も高い比率であることがわかる。

これらをグラフにしたものが図4-2.である。

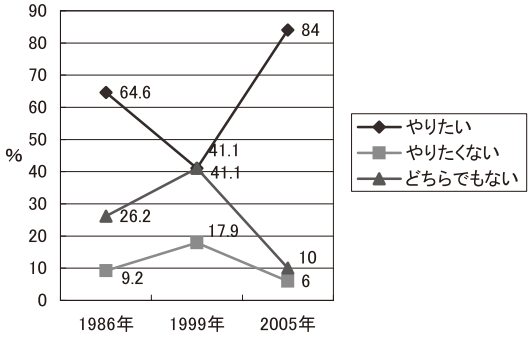

図4-2. 授業で楽器演奏すること（女子）

3）「音楽を作る活動」について

授業で「音楽を作る活動」をすることについては、表6-1.に示すとおりであった。

表 6-1. 授業で音楽を作ること　　人数（%）

	やりたい	やりたくない	どちらでもない	計
男子	13(24.1)	12(22.2)	29(53.7)	54
女子	18(36.0)	4(8.0)	28(56.0)	50

小学校において、「音楽を作る」というのはたいへん広い意味で用いられている。「作詞・作曲」というように狭く限定されたものではなく、リズム伴奏を様々な楽器で考えたり、雰囲気に合うような音探しをしたり、短い旋律をリコーダーで作ったり、というように、子どもたち自身で音を感じて作るすべてのことを含んでいる。このような「音楽を作る」活動について、表 6-1. に示されるように、男子は 29 名（53.7%）、女子は 28 名（56%）が「どちらでもない」と回答している。そして、男子は「やりたい」と「やりたくない」がそれぞれ 13 名（24.1%）、12 名（22.2%）とほぼ同数であるのに対し、女子では「やりたい」が 18 名（36%）、「やりたくない」が 4 名（8%）となっている。このように、男子よりも女子の方がやや積極的な気持ちであるように思われるが、有意な差とまでは言えない。男女ともに、過半数の児童は「どちらでもない」という回答であり、授業の工夫により、「やりたい」という児童を増加させることも可能であろう。

次に、時代による変化を男女別に見るために、３回の調査をまとめて表 6-2. 表 6-3. に示した。

表 6-2. は男子について、表 6-3. は女子についてそれぞれ示している。

表 6-2. 授業で音楽を作ること（男子）　　人数（%）

	やりたい	やりたくない	どちらでもない	計
1986年	10(15.2)	42(63.6)	14(21.2)	67
1999年	10(15.2)	36(54.5)	20(30.3)	66
2005年	13(24.1)	12(22.2)	29(53.7)	54

p<.001

表 6-3. 授業で音楽を作ること（女子）　　人数（%）

	やりたい	やりたくない	どちらでもない	計
1986年	11(16.9)	22(33.8)	32(49.2)	65
1999年	18(31.0)	20(34.5)	20(34.5)	58
2005年	18(36.0)	4(8.0)	28(56.0)	50

p<.005

表 6-2. より、男子では「やりたい」とする児童が、1986 年と 1999 年では両年ともに 10 名（15.2%）、2005 年では 13 名（24.1%）であった。「やりたくない」については、1986 年で 42 名（63.6%）、1999 年で 36 名（54.5%）、2005 年で 12 名（22.2%）であった。
このように、活動に対する気持ちは年代が後になるほど積極的になっており、それらは有意な差であった。（0.1%水準）

この表をグラフにしたものが図 5-1. である。

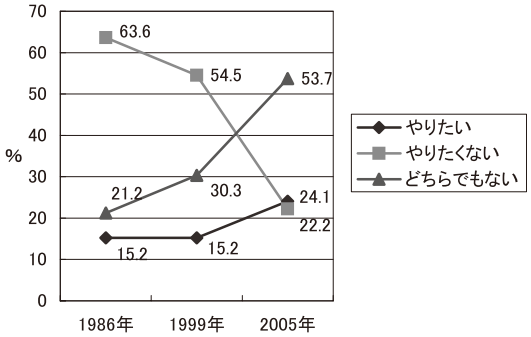

図 5-1. 授業で音楽を作ること（男子）

表 6-3. は女子の回答を示している。これより、「やりたい」とする女子は、1986 年で 11 名（16.9%）、1999 年で 18 名（31%）、2005 年で 18 名（36%）であった。一方、「やりたくない」という回答は、1986 年で 22 名（33.8%）、1999 年で 20 名（34.5%）、2005 年で 4 名（8%）であった。女子の場合にも、年代が後になるほど積極的な気持ちであることがわかる。（0.5%水準で有意）これをグラフに表したものが図 5-2. である。

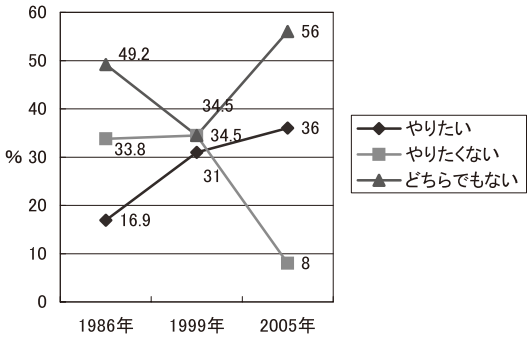

図 5-2. 授業で音楽を作ること（女子）

4）「音楽を聴く活動」について

授業で「音楽を聴く活動」をすることについては、表 7-1. に示すとおりであった。

表 7-1. 授業で音楽を聴くこと　　人数（%）

	やりたい	やりたくない	どちらでもない	計
男子	24(44.4)	3(5.6)	27(50.0)	54
女子	36(72.0)	3(6.0)	11(22.0)	50

p<.02

表 7-1. より、「やりたい」という回答は、男子 24 名（44.4%）、女子 36 名（72%）であった。これらの数値は、2）「楽器演奏をする活動」において「やりたい」とする数値に次いで多いものである。また、「やりたくない」という回答については、男子、女子ともに 3 名（男子 5.6%、女子 6%）であり、2）「楽器演奏をする活動」での「やりたくない」とする回答数と同程度の少なさである。

このように、「音楽を聴く活動」は男女ともに、「楽器演奏をする活動」に次いで支持される活動であることがわかる。しかし、男子は「どちらでもない」という回答が 27 名（50%）あり、女子ほどには積極的とは言えない。男女差は 2%水準で有意であった。

「音楽を聴く」ことに対する男子の好みの変化については、表 7-2. に示すとおりである。

表 7-2. 授業で音楽を聴くこと（男子）　　人数（%）

	やりたい	やりたくない	どちらでもない	計
1986年	26(38.8)	18(26.9)	23(34.2)	67
1999年	13(20.0)	19(29.2)	33(50.8)	65
2005年	24(44.4)	3(5.6)	27(50.0)	54

p<.005

表 7-2. より、「やりたい」という回答は、1986 年では 26 名（38.8 %）、1999 年では 13 名（20 %）、2005 年では 24 名（44.4%）であった。また、「やりたくない」は、1986 年で 18 名（26.9%）、1999 年で 19 名（29.2%）、2005 年で 3 名（5.6%）であった。このように、1999 年の回答がやや消極的であるが、2005 年になると「やりたくない」が激減するなどしており、これらの差は 0.5%水準で有意であった。

この表をグラフにしたものが図 6. である。

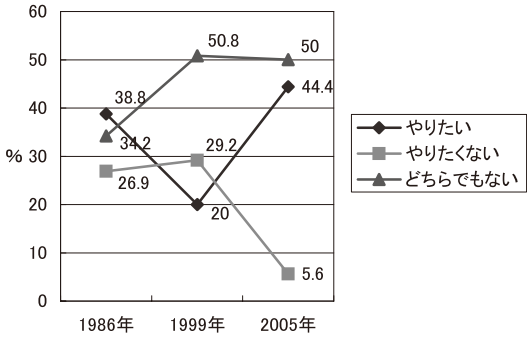

図 6. 授業で音楽を聴くこと（男子）

「音楽を聴く」ことに対する女子の好みの変化については、表 7-3. に示すとおりである。

表 7-3. 授業で音楽を聴くこと（女子）　　人数（%）

	やりたい	やりたくない	どちらでもない	計
1986年	46(70.8)	5(7.7)	14(21.5)	65
1999年	42(75.0)	0	14(25.0)	56
2005年	36(72.0)	3(6.0)	11(22.0)	50

表 7-3. より、「やりたい」と回答した女子は、1986 年では 46 名（70.8 %）、1999 年では 42 名（75 %）、2005 年では 36 名（72%）であった。これらの比率が示すように、時代による大きな違いは見られない。また、「やりたくない」についても、1986 年で 5 名(7.7%)、1999 年では 0 名、2005 年で 3 名（6%）というように 3 年ともに低い数値であった。

このように、全体的に大きな差はなく、検定の結果も有意差はみらず、変化はないと言える。

5）「楽譜や音符の勉強をする活動」について

授業で「楽譜や音符の勉強をする」ことについては、表 8-1. に示すとおりであった。

表 8-1. 授業で楽譜や音符の勉強をすること　　人数（%）

	やりたい	やりたくない	どちらでもない	計
男子	13(24.1)	11(20.4)	30(55.6)	54
女子	20(40.0)	4(8.0)	26(52.0)	50

表 8-1. より、男子は「やりたい」という回答が 13 名（24.1%）、「やりたくない」が 11 名（20.4%）となっており、大きなちがいは見られない。一方、女子は「やりたい」が 20 名（40%）、「やりたくない」が 4 名（8%）というように、「やりたい」と思っている児童

が多く、男子との差があるように見える。しかし、「どちらでもない」という回答が男女ともに過半数を占めているからか、検定の結果、男女間の有意差は見られなかった。

このように、男女ともに、「どちらでもない」という回答が過半数であることから、授業方法の工夫によって、児童の興味を惹きつける可能性はあると考えられる。

次に、好みについての時代によるちがいを男女別に見たところ、男女ともに変化していることが明らかとなった。男子についてみると表 8-2. のようになった。

表 8-2. 授業で楽譜や音符の勉強をすること（男子）

人数（%）

	やりたい	やりたくない	どちらでもない	計
1986年	3(4.5)	45(67.2)	19(28.4)	67
1999年	7(10.6)	35(53.0)	24(36.4)	66
2005年	13(24.1)	11(20.4)	30(55.6)	54

p<.001

表 8-2. より、楽譜や音符の勉強を「やりたい」とする男子は、1986 年では 3 名（4.5%）、1999 年では 7 名（10.6%）、2005 年では 13 名（24.1%）というように、次第に増えている。逆に、「やりたくない」とする男子は、1986 年で 45 名（67.2%）、1999 年で 35 名（53%）、2005 年で 11 名（20.4%）というように減っている。このように、時代による差が見られ、変化は顕著である。（0.1%水準で有意）

この表をグラフにしたものが図 7-1. である。

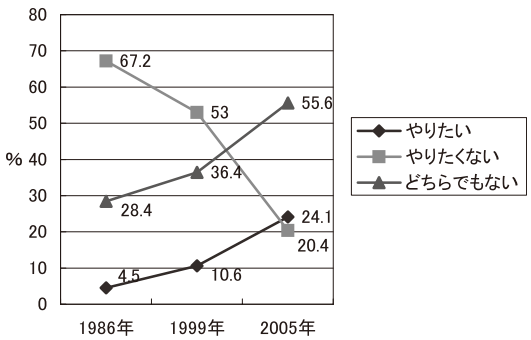

図 7-1. 授業で楽譜や音符の勉強をすること（男子）

女子の時代変化については、表 8-3. に示すとおりであった。

表 8-3. 授業で楽譜や音符の勉強をすること（女子）

人数（%）

	やりたい	やりたくない	どちらでもない	計
1986年	13(20.0)	10(15.4)	42(64.6)	65
1999年	10(17.5)	21(36.8)	26(45.6)	57
2005年	20(40.0)	4(8.0)	26(52.0)	50

p<.001

表 8-3. より、「やりたい」という女子は 1986 年では 13 名（20 %）、1999 年では 10 名（17.5 %）、2005 年では 20 名（40%）というように、1999 年で少し減少しているが、2005 年では 1986 年の 2 倍の比率になっている。「やりたくない」については、1986 年で 10 名（15.4 %）、1999 年で 21 名（36.8 %）、2005 年で 4 名（8%）というように、1999 年で増加しているが、2005 年で急減した比率になっている。これらは有意な差であり（0.1%水準で有意）、2005 年において「やりたい」と思っている女子が過去 2 回の調査よりも多いと言える。

この表をグラフにしたものが図 7-2. である。

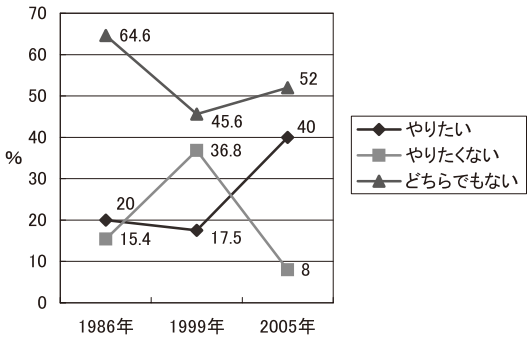

図 7-2. 授業で楽譜や音符の勉強をすること（女子）

5．まとめ

今回の調査をとおして、小学校高学年児童の音楽授業に対する嗜好は、前回までと同じく、全般的に男女で差のあることが明らかとなった。すなわち、男子よりも女子の方がすべてにおいて、「やりたい」という気持ちの児童が多く、音楽活動に対して積極的であった。しかし、男子の嗜好も時代により差が見られ、「音

楽活動をやりたい」と支持する男子は今回が一番多かった。

「音楽科目」に対する嗜好については、女子は50名中41名（82%）が「好き」であるのに対し、男子は54名中18名（33.3%）が「好き」というように、男子にはあまり支持されない科目と位置付けられた。しかし、時代によるちがいを見ると、男子において前回の調査よりも今回の方が、「好き」という回答率が高くなっている。同じことが女子の場合にも言え、男女ともに、音楽科目が好きという児童は以前よりも増加していることがわかった。

次に、「学校の音楽」と「学校以外の音楽」の好みについては次のようであった。男子についてみると、「学校の音楽が好き」と「両方好き」という児童、つまり、学校の音楽を支持する児童は30名（55.6%）というように、過半数を占めていた。女子の場合には、「学校の音楽が好き」と「両方好き」という児童を合わせると、36名（72%）であった。このように、「学校の音楽」は男女ともに多くの児童に好まれている結果となった。

一方、「学校以外の音楽が好き」としているのは、男子16名（29.6%）、女子13名（26%）であることや、「両方きらい」とする児童が、男子8名（14.8%）、女子1名（2%）であることもわかった。これらの児童を今後どのように学校の音楽に惹きつけていくかが課題となる。

授業における活動の好みについては、男女により、好む活動に差がみられた。「歌う」活動は、女子は29名（58%）がやりたいと思っているが、男子は13名（24.1%）というように低い数値であった。しかし、時代によるちがいでみると、「やりたい」とする男子の比率は、昔に比べて今回の方が高くなっており、現在の方が「歌う活動」は支持されていることも明らかとなった。女子の場合にも、歌う活動は昔以上に現代の方が、「やりたい」と支持される結果であった。

音楽の授業活動の中では、「楽器演奏活動」において男女ともに、「やりたい」という支持が最も多かった。男子は38名（70.4%）、女子は42名（84%）が「やりたい」としており、逆に「やりたくない」のは、男子1名（1.9%）、女子3名（6%）であった。時代によるちがいを見ても、楽器演奏活動を「やりたい」と思っている児童は、男女ともに昔よりも現代の方が多いことがわかった

「楽器演奏」に次いで男女ともに支持の多かったのは、「音楽を聴く」活動であった。男子は24名（44.4%）、女子は36名（72%）の児童が「やりたい」と回答していた。男子の場合は半数に達していないが、それでも、時代変化をみると昔よりも高い数値となっていた。

「音楽を作る」活動と、「楽譜や音符の勉強をする」活動の2つについては両方ともに、男子に比べると女子の方が、「やりたい」という児童は多かった。しかし、男女ともに「どちらでもない」という回答が半数を占めていることから、授業の工夫により、「やりたい」とする児童を増加させる余地はあるといえる。

以上より、高学年における「音楽」科目の指導においては、男女により好みの差があることを認識した上で、授業活動や内容を検討する必要があることが示唆された。

また、男女ともに高い比率で支持のある「楽器演奏」や「音楽を聴く」活動の取り入れ方や、「学校以外の音楽」の用い方、さらに、「どちらでもない」という児童に対する授業の工夫などというようなことが課題となるのではないかと考えられる。

註および引用文献

1）杉山知子　子どもの音楽行動に関する報告
美作大学紀要Ｖ ol.52　2007 pp.33-39

2）前掲書1）

3）小学校の音楽教科書を出版している「教育芸術社」では、指導用、鑑賞用としてレコードやCDを発売している。1983年まではレコードのみの発売であったものが、レコードとCDの併用時期を経て、1992年からはCDのみ発売するようになっている。これに伴い、学校現場においてはCD再生装置の導入が図られ、扱い方がレコードに比べて格段に便利になった結果、授業での利用も増え

ているのではないかと思われる。